

シラバス参照

授業科目名	健康保育B(病児・病後児保育)
単位数	1
授業形態	講義
講義コード	5756
授業担当者氏名	福水道郎(フクミズ ミチオ)

授業の到達目標 (ディプロマポリシーとの関連)	1. 病児・病後児保育の現場でよく遭遇する疾患を列挙できる。(DP1, DP4) 2. 病児・病後児保育/の利用実態を説明できる。(DP8, DP9) 3. 病棟保育士の役割を説明できる(DP8, DP9) 4. 病気に罹った子どもと保護者の心のケアに配慮できる。(DP 4, DP6, DP9) 5. 病気の極期を越えた後の関わり方を説明できる。(DP6, DP8)	
授業概要	・病児病後児保育の利用実態と病状にどのような変化があるかを知る。 ・病児病後児保育に関わる保育者として注意すべき点をアクティブラーニングとして学修する。 ・入院した子どもおよびその家族に対する病棟保育士の役割を学修する。 ・病児罹患中及び回復期の留意点を知る。 ・健康な家庭・保育環境に戻るために保育士として理解すべきこと、関わり方を知る。	
科目ナンバリング	1-KKO-2-N10-3-2	
科目ナンバリングについて	科目ナンバリングとは、授業科目に各々の番号を付すことで、学問分野や学修の段階等を表し、教育課程の体系性を明示する仕組みのことです。科目ナンバーは次のように構成されています。 1 - AAA - 1 - A01 - 1 - 1 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (1)設置 大区分(大学・短大) (2)設置 小区分(学部、学科、専攻等) (3)科目分類 大区分(共通科目、専門科目等) (4)科目分類 小区分(学問分野を体系化し分類) (5)配当学年 (6)科目種別(卒業に係る必修・選択の区分) 詳細は下記をご覧ください。	
科目ナンバリング参照ページ	https://www.tokyo-kasei.ac.jp/academics/course_number/post_3.html	
授業の特徴	特徴	該当
	A: 課題解決型学習(PBL)企業、自治体等との連携あり	
	B: 課題解決型(PBL)連携なし	
	C: 討議(ディスカッション、ディベート等)	○
	D: グループワーク	○
	E: プレゼンテーション	○
	F: 実習、フィールドワーク	
	G: 双方向授業(ICT活用なし: 対話型、リアクションペーパー等)	
	H: 双方向授業(ICT活用あり: クリッカー、manaba等)	○
	I: 反転授業	
	J: 外国語のみで行われる授業	
	K: オープンな教育リソース(JMOOC・edX・Coursera等)を利用した授業	
実施形態	対面授業科目	
実施形態について	※本学では、授業科目を以下のとおり分類しています。 対面授業科目 : 授業回数の全部あるいは授業回数の半数以上を対面で行う授業科目 メディア授業科目 : 上記「対面授業科目」以外で、主にメディアで行う授業科目 ※上記実施形態と異なる授業回がある場合は、以下「授業計画」欄に記載しています。	
授業計画		

	第1回	オリエンテーション 病児・病後児保育とは 施設の実態と保育士の役割(担当:福水)
	第2回	病児の利用実態と病状(担当:福水)
	第3回	気象医学・気象病 季節と日内変動(担当:福水)
	第4回	病児と関わる保育士に求められる知識と技能は?(担当:福水)
	第5回	入院した極期と回復して退院前の関わり 病棟保育士の役割(担当:福水)
	第6回	保育所における感染症対策ガイドライン 予防接種 感染症の特徴(担当:福水)
	第7回	地域連携と家族支援、病児・病後児保育の課題と展望(担当:福水)
授業外学修予習(事前学修)	各授業 [平均100分]	第1回前からmanabaにて事前学修課題を提示するので、調査してミニレポートにまとめる。
授業外学修復習(事後学修)	各授業 [平均100分]	授業後のリアクションペーパーはレポート欄に記入する。 授業内容と配布資料を振り返りまとめる。
評価方法	期末レポート60%、ミニレポート(事前学修課題・リアクションペーパー)30%、グループワーク参加・発表など平常点10% 60%以上を合格とする。	
教科書等	毎回資料を配布(manabaに提示)する。	
課題に対するフィードバックの方法	事前学修課題のレポート内容を毎回講義で15-30分ほど掛けて解説を加えてフィードバックし、同級生のまとめや考察を共有する。	
その他	授業の出席はResponを用いて集計する。 事情により参加できなかった場合はmanabaに提示してある資料を読み、次回講義までにmanabaに提出する。	
授業担当者の実務経験の有無	実務経験あり。	
「授業担当者の実務経験の内容」および「実務経験を活かした授業内容」	神経専門病院や障害児者療育センター、地域の一般小児科外来、発達・小児神経科外来及び病棟での診療経験をもとに、急性疾患・慢性疾患児の急変した極期や回復期の症状に対応し、困惑する家族支援も行ってきたことを講義に活かしていく。	
ファイル		